

(国語)

「生き生きと表現する子どもをめざして」

—説明文の読み取りを通して—

大阪市内立三軒家東小学校

1. 研究主題設定の理由

本校は、長年音楽科の研究を深めてきた。歌唱や器楽など、音楽科で培ってきた表現力を、国語科の物語文の読み取りを通してさらに豊かなものにしていきたいと考え、令和元年度から2年間、「物語文」の読み取りを通して表現力を高める取り組みを実践してきた。「言葉」は、相手に自分の思いを伝えるためにとても大切なものである。しかし、単に「言葉を発する」だけでは、思いは十分に伝わらない。歌唱で表現してきたように、どのようにすれば思いが伝わるのか、どのような工夫が必要なのかということを考え、「言葉」を大切に表現しようとする態度を育ててきた。

新学習指導要領では、『国語科で育成を目指す資質・能力を「国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力」と規定するとともに、「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」を育成するには、児童が「言葉による見方・考え方」を働かせることが必要である。』とされている。

このようなことから、研究主題を、「生き生きと表現する子どもをめざして」と設定し、国語科の「物語文」「説明文」を中心に研究を進めてきた。

2. 研究の趣旨

昨年度からは「説明文」についての読み取りや、自分の考えを自分の言葉で表現する活動について、研究を進めている。文章の構成や内容について重要な言葉に着目しながら読み取り、理解したことに基づいて自分の考えをもったり、まとめたりすることに重きを置いている。また、発達段階に応じて、友だちの考えを聞き、自分の考えと比較しながら違いを感じたり、自分の考えを広げたりする活動にも取り組んでいる。

若手教員が多い中、指導者自身が教材をしっかりと読み深め、説明文の根底にある作者の思いに心を寄せ、国語の指導法の「how to」を身につけていって欲しい。

そして、本校児童の特徴である「国語の学習はわかる。」>「国語の学習は好きである。」を、「国語の学習はわかる。」＝「国語の学習は好きである。」となるよう、教員一丸となって取り組みたい。

3. 研究の概要

研究主題にせまるため、研究の視点を以下のように設定した。

視点① 自分の考えや思いを表現するための有効な手立て

- 3～6年生は、「レッツゴー」→「ホップ」→「ステップ」→「ジャンプ」と4段階に分け、習熟度別授業で行う。
- 児童が主体的に活動し、自分の思いや考えを文字や言葉に表すことができる授業の組み立てを考える。
- 丁寧に読み進めるためのワークシートを工夫する。

○ 朝の学習タイムでの読書、学校図書館の活用等を通して、楽しく読書する習慣を身につけさせる。

視点② 自分の考えや思いを表現する場の設定の工夫

- 読み取ったことをもとに、自分の思いや考えを自分の言葉で表現し、伝えることの喜びを味わわせる。
- 学んだことが生かされるような学習発表の場の設定を工夫する。

視点③ ICT を効果的に活用した指導法

- 導入場面や文章の作成、意見交換などで、ICT の効果的な活用法を模索する。
- デジタル教科書、大型モニターや書画カメラ等を使い、課題や情報を共有しやすくする。
- 発表ノートやパワーポイントなどのソフトを活用し、考えをまとめたり、伝えたりすることができるようにする。

4. 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

子どもの「生きる力」の向上、教員の指導力の向上をめざして、令和元年度より国語科の研究を進めてきた。一昨年度までは物語文についての研究を行ってきたが、昨年度からは、説明文についての研究に取り組んだ。物語文で培った読む力や書く力を生かしながら、内容を正確に読み取ったり、根拠をもって自分の考えをわかりやすく表現したりすることができるように進めてきた。

今年度は、説明文の研究としては2年目となるため、昨年度に出た成果や課題を生かしながら取り組むことができた。研究主題にある、「生き生きと表現」するためにはどのような教材、ワークシート等を扱い、どのように指導したら良いのかを常に考えながら指導してきた。1学期には、各学年で説明文の文章構成や内容の読み取りを中心に行い、2学期以降は教材文を読み取るだけでなく、そこで学んだことを生かす活動を多く取り入れた。資料を使って調べたことをパンフレットにまとめたり、発表ノートやパワーポイントなど、ICT を活用しながらまとめたものを発表したりする活動である。インプットした知識や技能を使って、試行錯誤しながらアウトプットする機会、場を設けることで児童の学びが深まり、生活の場で活用することができる「生きた学力」が、少しずつ身に付いてきている。

(2) 今後の課題

理解に時間のかかる児童に対しては、習熟度別少人数授業の実施、児童の実態に合わせたワークシートの工夫等をしながら、個に応じた指導を心がけている。しかし、内容を読み取ることが苦手な児童、自分の考えを持つことが苦手な児童にとっては、自分にとって必要な資料や情報を集めてくること、調べたことをまとめ、相手に伝えることなどの「活用」という段階はハードルが高い。そのような場面において、どのような支援をしていくのか、今後も継続して効果的な方法を模索していく必要がある。